

東日本大震災以後の備忘録ないしは切り抜き帳(その62)

[2017年8月20日(日)]

○今日は広島土砂災害からちょうど3年目と云うことで、以下に『広島土砂災害 住宅地には新しい家も…きょう3年』と題する毎日新聞の記事と写真を転載させて頂きたい。「77人が犠牲となった広島土砂災害は20日で発生から3年となる。広島市安佐北、安佐南両区で国や県が緊急復旧事業として計画した砂防ダム約30基が、今年5月までに完成した。50人以上の死者が出た安佐南区の八木地区でもダムが整備され、山裾の住宅地に新しい住宅が建ち始めている。ただダムの多くは、3年前と同程度の土砂を食い止める暫定処置で、堰堤のかさ上げなどは2019年度ごろまでかかる見込み。市町村が危険箇所を周知する「土砂災害警戒区域」の指定も進んでいない。県内の該当区域は全国最多の49,500カ所あるが、指定は今年8月時点で4割にとどまる。(署名記事)」
☞ 3年前に広島を訪問して、土砂災害の凄まじさを見せて頂いた印象は以下のようなものであった。当時の被災地域における1時間降水量100mmはともかくとして、総降水量200mmは決して驚くような値ではなかった。総降水量だけの比較でみれば、2013年の伊豆大島土砂災害の800mm、2010年奄美大島水害や先月の九州北部水害の1,000mm、2011年南紀水害の1,500mmなどに遠く及ばない。このような降水量の多寡は誘因として作用するに過ぎず、問題は素因としての地域の地形・地盤環境や都市開発の在り方が災害対策として適切なものであったか否かではなかろうか。被災された方々には誠に申し訳ないのであるが、土砂の崩壊は不安定な地表の形状を安定にするための自然現象であって、それが災害となるのは人間社会がそこに介在するからに他ならない。本サイトに関連資料があるので、“折々のトピックス”の『8月20日に発生した広島市安佐南区の土砂災害現場を調査してきました(資料編集：2014年9月17日)』，“これまでの研究活動から”の『最近多発している豪雨災害について』をご参照いただければ誠に幸いである。



広島土砂災害から3年が経過し、復興が進む広島市安佐南区八木地区の住宅地。山裾に砂防ダムが完成した=2017年8月19日、毎日新聞社ヘリから撮影



泥に埋まった広島市安佐南区八木地区=2014年8月20日、毎日新聞社ヘリから撮影

[2017年8月21日(月)]

○今朝の東京新聞“筆洗”から拝借。この種の話には何故か心惹かれるものがある。「この間、南部でレストランに入ったんだ。そしたら白人のウエイトレスが飛んできてこう言うんだ。『うちの店じゃ、黒人は食べられないよ』。オレは言い返したよ。『大丈夫、オレは黒人を食べないから』」▼米国では有名なジョーク。誘われるのは爆笑というよりもちょっと引きつった笑いか。発表されたのは黒人差別がなお強い1960年代。この作品をはじめ、差別に対する辛口のジョークで一世を風靡した黒人コメディアンで人権活動家のディック・グレゴリーさんが亡くなった。84歳▼米国には黒人の進出を許さぬ、さまざまなカラードバリアーがあったが、グレゴリーさんは61年、白人相手にスタンダップコメディアンを初めて見せた黒人だったと聞く▼その芸は笑いに巧みにまぶした差別への敵意と悲しみである。「黒人の宇宙飛行士が実は大勢いると聞いた。何でも最初の太陽着陸のためだっさ」。自伝の題名は黒人の蔑称である「ニガー」。許せない呼び方にもかかわらず、そう付けたのは「もし、どこかで白人が黒人をそう呼べば、本を宣伝することになる」▼差別や差別する者をちゃかし笑う。その笑いが広がれば世の中は変わる。「よくできたジョークには力がある」。しなやかな武器で、差別と闘った人である▼大統領が白人至上主義者に遠慮する時代。「よくできたジョーク」が聞きたい。」

○同じく東京新聞社説『政治と世論を考える<1> 変革を迫る大きな力に』から引用させて頂く。「内閣改造後の3日夕、記者会見した安倍晋三首相は冒頭、謝罪の言葉から切り出した。「さまざまな問題が指摘され、国民の皆さまから大きな不信を招く結果となった。改めて深く反省し、国民の皆さまにおわび申し上げたいと思う」その約1カ月前、東京都議選の応援演説では「安倍辞めろ」と叫ぶ聴衆に「こんな人たちに負けるわけにはいかない」と声を張り上げた首相。目を閉じて頭を下げる姿からは「安倍一強」を謳歌していたころの高慢な態度は消えていた。国政選挙で惨敗したわけでもないのに、なぜ謝罪に追い込まれたのか。それは報


道各社の世論調査で内閣支持率が急落したからにはほかならない。例えば、共同通信社が毎月実施する全国電話世論調査。5月に55.4%あった内閣支持率は、6月に44.9%に急落し、7月には35.8%に続落した。2012年の第2次安倍内閣発足後、最低だ。背景には、首相自身が会見で指摘したとおり、森友学園への国有地売却、加計学園による獣医学部新設、防衛省・自衛隊の日報隠しに対する国民の反発がある。世論(輿論(よろん)とも)とは「世間一般の人が唱える論。社会大衆に共通な意見」(岩波書店「広辞苑」第6版)を指す。その全体の動向を統計学に基づいて科学的な手法で調べるのが世論調査だ。政権の座にある者はしばしば、世論調査結果について「一喜一憂すべきでない」と平静を装うが、内心では気になって仕方がないのが実態だろう。なぜなら内閣支持率は、政権基盤の一部を成す重要な構成要素だからである。支持率が高ければ、その政権の政策実行力は強まるし、逆に低ければ反対を押し切ってまで政策を推進することはできない。何より支持率が低ければ次の選挙が戦えないとの空気が蔓延し、首相・党首交代論すら出かねない。個別政策も同様だ。世論調査で反対の強い政策を進めるには、よほどの理由が必要となる。世論軽視との批判も覚悟しなければならない。有権者の側からすれば、世論の動向は権力者に変革を迫る大きな力となる。政権を代えるのも、政策の方向性を決めるのも、突き詰めれば世論である。……私たちの世論は政治にどんな影響を与えているのか。政治と世論について考えます。」 ☒ この続編に期待しています。

[2017年8月22日(火)]

○昨日に引き続き、東京新聞社説『政治と世論を考える<2> 5.15事件と民衆心理』からの引用である。「5.15事件。1932(昭和7)年5月15日に官邸にいた犬養毅首相を海軍将校らが暗殺したテロ事件に対し、当然、当時の新聞も厳しい論調で向かった。「日本新聞通史」(春原昭彦著)は「かなり大胆にファッショを排撃した。とくにその論旨がきびしかったのは、東西の朝日、新愛知(現中日)、福岡日日(現西日本)」と記している。新愛知(中日新聞)の社説は、第2,第3のテロの出現を予測している。そして「武器を所有するものが、赤手空拳にして何らの防備をも有せざるものに対する場合、それは武力を有するものが勝つに決まっている」と記す。だが、それは「物質的な勝利」にすぎないのであって「人間の意思が暴力でどうすることもできない」と書き進む。そして、「いわんや立憲政治がピストルの弾の10や20のため、そのたびにぐらぐらしてたまるものではないということは、常識のあるものはだれだって知っている」大正デモクラシーの息を吸った立憲政治はそれほど強固だと考えられていたのだろう。だが、この事件後、政党内閣の慣例はもろくも打ち破られてしまう。もう一つの異変は世論の動向である。国民は何とテロの実行犯に同情的に変化するのである。1933年になると軍法会議が始まり、新聞に裁判記事が載った。「東北地方の飢饉を聞いて、国軍存立の為にも一時も早く現状打開の必要を感じ…」など被告の心情が報じられると、国民は将校らに清新さを覚え、減刑嘆願書を出すことが大衆運動となった。嘆願書の数、実に100万を超えたという。将校らの行動は「義挙」だと国民は感じたのだ。その変化はやはり新聞報道に起因するところが大きかったようである。判決はこの国民感情に応えたように軽いものとなる。首相暗殺でも刑はたった禁錮15年。しかも1938年には仮釈放である。立憲政治はピストルの弾でぐらつかなかったのかもしれない。でも、そこに熱せられた世論が入ると、予期せぬ化学反応を始める。暗殺を義挙だと変換する世論に支えられていれば、暴力は大手を振って闊歩し始めるのだ。今年7月に亡くなった犬養毅の孫道子は当時小学生。母親は米を買いに行っても売ってくれなかったそうである。遺族をも白眼視する、倒錯した群集心理はいつの世も抱え込んでいるのではないか。」 ☒ 中島岳志著『「リベラル保守」宣言(新潮文庫,2016)』によれば「輿論(パブリック・オピニオン、すなわち公的な意見)と世論(ポピュラー・センチメント、すなわち大衆的な気分)は全くの別物であって、この両者を、かつての日本人はしっかりと区別してきたのであるが、輿論という言葉が使われなくなったのと並行して、パブリック・オピニオンがポピュラー・センチメントに飲み込まれるという現象が起こってしまったのではないか」とのことである。「将校らの行動を義挙だとする国民感情」は輿論なのか、それとも世論なのか。

[2017年8月23日(水)]

○さらに今朝の東京新聞社説『政治と世論を考える<3> 輿論と世論の違いは?』は続く。「世論」と書いて、「よろん」と発音する人もいるし、「せろん」と発音する人もいる。京都大学の佐藤卓己教授によれば1980年の調査では「せろん」と読む人が過半数だったが、それから約10年後には逆転して、「よろん」が6割を占めているのだという。偶然ではない。「戦前に教育を受けた世代と戦後の世代で多数派が交代した結果なのです」(佐藤教授)「輿論(よろん)」とは「天下の公論」であり、「世論」は明治時代の新語で、大正時代の辞書では「外道の言論、悪論」と書かれているようだ。だから、戦前に教育を受けた世代が「世論」を「よろん」と読むことはありえないのである。軍人勅諭にもこんなくだりがある。「世論に惑はず政治に拘らず」一。

この場合も「世論」が「外道の言論」なのだからであろう。戦後、当用漢字表から「輿」の文字が除外され「よろん」に「世論」の字が当てられるようになり「よろん派」「せろん派」の2派が登場することになる。では、新聞社が行う世論調査は、「せろん派」で世の中の空気を読むだけの国民感情調査なのだろうか。それとも「よろん派」で、責任ある意見をくみ取る調査なのだろうか。この判定は場合にもよるが、どちらも言い難い。専修大学の山田健太教授は「欧米では社会の階層ごとに読む新聞が違います。例えば英国ならば上の層ではガーディアン紙、下の層ではイェローペーパーでしょう。しかし、日本の場合は違います。どんな市民でも読むメディアの差はありません」という。確かにサラリーマンでも、大学教授でも読んでいる新聞は、ほぼ同様のものであり、メディアの質そのものに大きな違いがない。お年寄りも老眼鏡を頼りにじっくり記事や社説を読む。「日本の読者は新聞を読んで知識を蓄えているわけで、新聞社の行う世論調査がたんなる『国民感情調査』に陥っているわけではないと思います。知識を持ち意見を持った『輿論調査』の面もあると思うのです」「世論に問う」ー。難しい政治テーマについて、こんな言葉を政治家がいう時代になっている。例えば劇場型政治がそうだ。賛成・反対で社会分断を図る。単純な言葉で世論を動かそうとする政治手法にメディアがどう対抗できるか問われる時代でもある。」 輿論調査でも世論調査でも構わないが、「どちらも言えない」との回答が多数を占める調査ほど信用できないものはない。恐らくは、調査をする側の質問の仕方がおかしいのではないかと、調査をする側の誠意と熱意を疑う。

[2017年8月24日(木)]

○今朝の東京新聞社説は『政治と世論を考える<4> トランプ氏の情報空間』と題するシリーズ第4弾であった。「やつらを見ろ」トランプ氏が記者席を指さした。すると会場を埋めた支持者がトランプ氏と声を合わせて「やつらは最も不正直な人間だ」とブーイングを浴びせた。昨年の米大統領選。トランプ氏の選挙集会ではメディアたたきが繰り返され、就任後の今もメディア敵視は続いている。メディアも黙ってはいない。ウォーターゲート事件の報道でピューリッツァー賞に輝いた元ワシントン・ポスト紙記者のバーンスタイン氏は「これほど悪質な大統領は見たことがない」と批判し、メディアがトランプ氏に立ち向かうよう訴えた。ニューヨーク・タイムズ紙がアカデミー賞授賞式の中継で流したCMは「真実がこれまで以上に重要になっている」との文言で結ばれた。メディアは事実を武器に政権と対峙しようとしている。ところが、ある世論調査によると、メディアにはフェイク(偽)ニュースが多いと65%の人が信じ、うち共和党支持者では8割に達する。メディア不信は深い。トランプ氏も「既成メディアはフェイクだらけだ」と毒づくが、自分の方こそ根拠のない発言を乱発し、取り巻きも同調する。大統領就任式の観客数をめぐる騒動がいい例だ。オバマ氏が就任した8年前の時の写真と比べて明らかに少ないのに、当時の大統領報道官は「過去最多だ」と自賛した。これをメディアが疑問視すると、大統領顧問は「オルタナティブ・ファクト(もう一つの事実)だ」と真顔で強弁した。トランプ氏がツイッターを重宝するのは、既成のメディアを介さず支持者に直接、メッセージを伝えることができるからだ。支持者を扇動する強力な武器になる。だから、いくら批判を受けてもツイッターをやめようとはしない。ネット空間では自分の嗜好や立場に合った情報だけを選択できる。メディアがトランプ氏の虚偽をいくら指摘しても、こうした別の情報空間にいるトランプ支持者は聞く耳を持たない。支持層がなかなか崩れないのは、これが大きな理由だ。だが、自分の気に入らない情報は排除し、好みに合うものだけを受け入れれば、客観性を失い、偏見を自ら助長させる危険を伴う。正しい情報や事実に基づかない政治がまともであるはずがない。この歪みは危険である。」

[2017年8月25日(金)]

○今朝も東京新聞社説は『政治と世論を考える<5> 原発ゼロの民意どこへ』と題する第5弾を掲載していた。「討論型世論調査」を覚えていますか。3.11翌年の夏、当時の民主党政権が震災後の原発政策を決める前提として実施した。政府としては初めての取り組みだった。無作為抽出の電話による世論調査に答えた全国の約7,000人の中から300人ほどに、1泊2日の討論会に参加してもらい、専門家による助言や質疑を織り交ぜながら、参加者の意見が議論の前後でどのように変化するかを見た。2030年の電力に占める原発の割合として、ゼロ、15%、20~25%の3つのシナリオが示されており、学習と討議を重ねて理解を深めた結果、「原発ゼロ」と答えた人が全体の約3割から5割に増えた。併せて公募した意見では、9割近くが「原発ゼロ」を支持していた。このような民意に基づいて、原発は稼働後40年で廃炉にし、新增設はしないことにより「2030年代ゼロ」に導くという「革新的エネルギー戦略」が決められた。それを現政権は「具体的な根拠がない、ゼロベースに戻す」と、あっさりご破算にした。特定秘密保護法や集団的自衛権、「共謀罪」などの時と同様、内閣支持率の高さだけを背景にした“具体的民意”の無視、というよりは否定とは言えないか。その後も世論調査の

たびに、脱原発には賛成、再稼働には反対の意見が過半を占める。6月の静岡県知事選中に本紙が実施した世論調査でも、県内にある中部電力浜岡原発は「再稼働すべきでない」という意見が約6割に上っていた。にもかかわらず、政府はエネルギー基本計画の見直しに際し、はじめから「30年20～22%」の原発比率を維持する考えだ。3.11前の割合は28%。老朽化が進む今、新增設なしには実現できない数字である。改めて国民的議論を起こす様子はない。3.11を教訓に「脱原発」を宣言し、原発の新設工事を中断させた韓国政府は、世論調査や討論会でその是非を国民に問う。ドイツの脱原発は、専門家や利害関係者だけでなく、聖職者などを含めた幅広い意見によって立つ。なのに今の日本は、政府の独断専行を“有識者”が追認するという“逆行”を改める気配がない。国民の声より大事な何か、国民の命以上に守りたい何か、そこにあるのだろうか。」

[2017年8月26日(土)]

○東京新聞社説の『政治と世論を考える』シリーズが最終回を迎えた。そのタイトルは『〈6〉新聞の責任かみしめる』であった。以下に全文を転載させて頂く。「世論研究の先駆的著作『世論』が米国で刊行されたのは1922年。著者であるリップマンが33歳のときだった。彼の疑問は、この複雑で巨大な現代社会で一般の人々が問題を正しく理解できるか、民主主義が可能か、ということだった。確かに民主主義は主権者である国民が正しくさまざまな問題を理解し、正しい投票をする前提で動いていく仕組みである。だが、どう考えても彼には人々が正しい理解をしているとは思えなかった。従って公衆が賢明な意見を持つことを前提とする民主主義は成り立たない。だから、情報の分析や判断は、専門家集団に委ねざるを得ないと考えた。専門家とはジャーナリストなどだ。第1次世界大戦に情報担当大尉として加わり、世論がいかに政府によって操作されやすいものであるかも体験していた。それが『世論』を書く動機でもあった。〈新聞は1日24時間のうちたった30分間だけ読者に働きかけるだけで、公的機関の弛緩を正すべき『世論』と呼ばれる神秘の力を生み出すように要求される〉(『世論』岩波文庫)リップマン自身がワールド紙の論説委員であったし、新聞コラムを書くジャーナリストであった。晩年にはベトナム戦争の糾弾で知られる。正しいと信じる意見を述べ続けていたのである。現在の日本の新聞界はどうか。日本新聞協会が昨年発表した全国メディア接触・評価調査では新聞を読んでいる人は77.7%。「社会に対する影響力がある」との評価は44.3%で、2009年調査の52.8%より低下。「情報源として欠かせない」との評価は32.5%と、2009年調査の50.2%より大きく落ち込んだ。影響力はあるとしても、情報源として不可欠であると思う人は減っている。つまりインターネットなどとの接触が増えているのだろう。だが、ネット社会は虚偽の情報も乱れ飛ぶ密林のようなものでもある。リップマンに従えば専門家を紹介しないと、国民は問題を理解できなくなり、世論は政府に操作を受けやすくなる。逆に、熱した世論に迎合する政治だってありうる。そうならないよう、情報を集め分析し国民に知らせるのが私たちメディアの仕事である。ネットも同様だ。世論の重みをあらためてかみしめたい。＝おわり(署名記事)

☒ これまで6回に亘って『政治と世論を考える』シリーズを社説として取り上げてこられた東京新聞の熱意には敬意を表したい。政治と世論との関わりについて、戦前・戦中あたりの歴史的背景や、ごく最近のトランプ米大統領の言動、3.11後の原発を巡る問題、政治と国民を繋ぐジャーナリズムの役割など、どれもが大変重要で、興味深い論点であったように思われる。とりわけ最後の傍線を付した「リップマンに従えば、専門家を紹介しないと国民は問題を理解できなくなり、世論は政府に操作を受けやすくなる。逆に、熱した世論に迎合する政治だってありうる。そうならないよう、情報を集め分析し国民に知らせるのが私たちメディアの仕事である」と云う箇所には今後とも注目させて頂きたい。確かに「情報を集め分析し国民に知らせる」のはメディアの仕事に違いないが、もう一つ、さらに重要なのは「個々の政策に対して、国民にどのような影響を与え、国民がどのように反応したか」を国民の視点からレポートして載くことではないかと考える次第である。

[2017年8月27日(日)]

○今朝の秋田魁新報では『復興祈り「激励花火」打ち上げ 熱意、雨吹き飛ばす』との見出しを掲げて、昨夜の「大曲の花火」の模様を伝えていた。「秋田県大仙市大曲で26日開かれた第91回全国花火競技大会(大曲の花火)は、会場の雄物川河川敷を埋め尽くした観客がト



全国花火競技大会で打ち上げられた色鮮やかな花火(26日夜)とその前日の状況＝秋田県大仙市(写真は共同通信)

ップレベルの花火業者による作品の競演を楽しんだ。2度にわたる会場の冠水で一時は開催が危ぶまれたが、打ち上げは好天の下で行われ、観客や大会関係者は喜びの表情を見せた。会場の河川敷は7月の記録的大雨で冠水したほか、大会前日の25日午前にも棧敷席や打ち上げ現場が水に浸かった。市や大曲商工会議所の職員、花火業者などが総出で復旧作業に当たり、26日午前6時に開催を正式決定した。午後4時には雲が晴れ、会場は青空が広がった。宮城県気仙沼市から訪れた小野寺次徳さん(70)は「朝にラジオを聞いて予定通り大会を開くと知り、ほっとした」。東日本大震災で自宅が被災し、仮設住宅での暮らしも経験したといい「自然災害の大変さはよく分かる」と話した。夜花火が始まる前の午後6時40分すぎ、大雨からの復興を祈る激励花火がスタート。「花火で元気をお届けしたい」とのアナウンスに続き、計30発が打ち上げられた。夜花火では全27業者が星形やベル形の花火、群れ飛ぶホタルを模した花火など、技術を凝らした作品を次々と披露した。」


○昨晚の共同通信のネットニュースでも『豪雨乗り越え秋田・大曲の花火 夜空彩る1万8千発』と題して、以下の記事と写真が掲載されていた。「全国の花火師が技を競い合う第91回全国花火競技大会(通称:大曲の花火)が26日、秋田県大仙市で開かれ 約1万8千発の花火が夜空を彩った。25日の豪雨で市内を流れる雄物川が氾濫し、会場の棧敷席が冠水するなど大きな被害が出たが、市の職員らが復旧作業をして、開催に間に合わせた。午後7時前に打ち上げが始まり、次々と夜空に広がる赤や青など色とりどりの花火に、約74万人の観客(主催者発表)からは歓声や拍手が湧き起こった。」

○また「大曲の花火」主催者のサイト情報を見ると次のように、開催に向けて大変なご苦勞があったことが良く判る。

・昨日までの雨により有料自由観覧席の足場が悪くなっております。そのため今回は無料といたします。募金箱を設置しておりますので、ご協力をお願いいたします。(平成29年8月26日)

・本日の第91回全国花火競技大会は、予定どおり開催いたします。昨日までの雨により足下が大変悪くなっております。長靴など十分な対策をしてお越し下さいますようお願い致します。(平成29年8月26日)

・8月25日9時30分現在、観覧会場また打上会場が冠水しております。河川の水位が下がり次第全力で復旧努力致します。なお最終決定は明日8/26の午前6時に発表致します。(平成29年8月25日)

・7月22日(土)から23日(日)にかけて、秋田県内は集中豪雨に見舞われ、花火の会場となる雄物川河川敷も冠水しました。一部の資材は流されてしまったものの現在は水が引き、復旧作業を行っております。よって第91回全国花火競技大会「大曲の花火」は予定通り8月26日(土)に開催いたします。たくさんのお問い合わせ、温かい言葉をいただき、ありがとうございました。(平成29年7月25日)  今回の2度に亘る大災害を克服して「大曲の花火」を実現されたご関係各位には心からの敬意を表する次第です。



[2017年8月28日(月)]

○今朝の朝日新聞“天声人語”『木曾の蛇抜け』を以下に転載させて頂く。「「夏らしい暑い日だった/一時間程(ほど)白い雨が降った/麓(ふもと)では雨が降りやむ頃(略)南木曾(なぎそ)山の頂(いただき)から蛇抜けが出てきた」。長野県南木曾町を訪ね、先月建てられた石碑を見た。3年前、中学生の命を奪った土石流のすさまじさを伝える▼題を「平成じゃぬけの碑」という。蛇抜けとは聞きなれぬ言葉だが、木曾一帯では危険な土石流を指す。斜面が急なため雨が奔流となって沢を下り、岩や土が村々を押しつぶす▼「大蛇が身をうねらせるように沢を駆け下りる。昔は『山抜け』と呼びました」。分厚い町史を開いて堀賢介・町総務課長(58)が話す。大きな蛇抜けは数10年ごとに起き、古くは江戸末期、天保年間に死者99人の記録がある。供養のために建てられた石地蔵を住民はいまも大切に守る▼昭和28(1953)年の被害も激しかった。土石が教員住宅を直撃し、3人が亡くなった。中学生たちが古老から予兆を聞き取り、有志が石碑に刻んだ▼刻まれた教えは6つ。「白い雨が降るとぬける」。視野が白くかすむ大粒の雨が降ったら注意せよ。直前には火薬臭のような「きな臭い匂いがする」。ぶっきらぼうな箇条書きの行間から生き延びた人々の声が聞こえる▼今年も列島各地で雨や水が猛威をふるう。河川の勾配が急なこの国では、鉄砲水や土石流などに備えを怠らず暮らす

ほかない。大切なのは後の世代が油断せぬよう水の猛威を語り継ぐことだろう。江戸、昭和、平成の蛇抜けの跡を訪ね、先人の警告を胸に書きとめた。」 ☞『木曾の蛇抜け』の石碑についてももう少し詳しいことが知りたいと思い、ネット検索を試みた。便利なもので、早速、以下の毎日新聞の記事を見ることができた。

○本年7月13日付け毎日新聞地方版の“信州・歴史探訪”と云う記事がそれで、『蛇ぬけの碑(南木曾町) 土石流の戒めを刻む/長野』と題する次のような内容であった。「2014年の土石流被害を後世に伝えるため、「平成じゃぬけの碑」が現場に建てられた。9日に献花式が行われ、亡くなった樽沼海斗さんをしのんだ。南木曾町では古くから土石流のことを「蛇抜(じゃぬ)け」と呼んで恐れてきた。蛇が山をはって落ちてくる姿を例えた言葉だ。木曾川右岸の天白公園の道路沿いに、巨大な岩を使って造られた「蛇ぬけの碑」が建つ。1953(昭和28)年7月20日、この碑がある伊勢小屋沢を襲った土石流災害の教訓を伝えるため、60年に地元有志が建てた。災害では3人が犠牲になった。碑の表面には後世への戒めとして「蛇抜け」の恐ろしさを刻んでいる。

- ・ 白い雨が降るとぬける
- ・ 尾(根の)先 谷(の出)口 (お)宮の前(には家を建てるな)
- ・ 雨に風が加わると危ない
- ・ 長雨後 谷の水が急に止まったらぬける
- ・ 蛇ぬけの水は黒い
- ・ 蛇ぬけの前にはきな臭い匂いがする

碑の近くに住む牧野政彦さん(79) =南木曾町読書(よみかき)沼田=は、読書中(現在は南木曾中)3年の時、この災害を体験した。その日は、朝から激しい豪雨だった。牧野さんは川の水が黒く濁ったのを目撃した。土石流が発生したのは午前7時52分ごろ。バスケットボール部の朝練習のため、学校の体育館にいた牧野さんは、不気味な地響きを聞いた。土石流発生を知らせるベル

が鳴り、牧野さんは仲間5人と体育館を飛び出した。「とにかく夢中で逃げた」。校舎を突っ切って、土手に上がった。校舎の1階や運動場などは流れ込んだ土砂と流木に覆われた。教員たちと救助活動に当たったが、助けを求める女性の叫び声が耳から離れなかった。太田美明校長が避難と救助を指揮し、約200人の生徒は全員無事だった。しかし教員住宅が流され、太田校長の幼い子供2人と、教員の妻が犠牲になった。牧野さんは「蛇抜けには前兆がある。何とも言えない臭いが漂い、ドンドンという地響きがしたら危ない。とにかく身一つでも、すぐ逃げなければだめだ」と、体験から得た教訓を地元の子供たちに話している。◇ 2014年7月9日、また南木曾町は「蛇抜け」に襲われた。61年前の伊勢小屋沢とは木曾川をはさんだ反対側の梨子沢(なしざわ)。豪雨で土石流が発生し、住宅10棟が全壊する被害が出た。自宅にいた南木曾中1年だった樽沼(くれぬま)海斗さん(当時12歳)が亡くなった。この被害を伝える「平成じゃぬけの碑」が今年建てられた。碑文には、災害後のさまざまな支援へ感謝を表し、「町は蘇った 山も川も蘇った ここに住み続ける私達も今こそ蘇る」と記している。向井裕明町長は「災害は人の力では防ぎきれない部分もある」という。「それでも、防げるものは防ぎ、かわせるところはかわし、被災を小さくできるものは小さくしていく。自分たちの判断で身を守り、しっかり避難し、災害に対応できる力を町民がつけることが大切だ」と教訓を伝えている。」

南木曾町の土石流災害について「町に残る記録では、江戸時代末期の1844年5月、死者99人を出す被害が与川であった。明治時代の1904年7月には蘭川流域で死者39人を出した。53年の伊勢小屋沢の土石流災害後、65、66年にも土石流被害があったが、死者は出なかった。南木曾町は傾斜が急な土地が多く、山の地質がもろく、降雨量が多く、土砂災害が起きやすい条件が重なっている。」 ☞ どうやら、1953年と2014年の2つの土石流災害に対して、当地の「蛇ぬけの碑」は2つ存在しているようである。それにしても数10年毎に土石流災害に襲われる地域とは、何とかならないものだろうか。

[2017年9月7日(木)]

○先日(8/28)、朝日新聞“天声人語”『木曾の蛇抜け』を転載させて頂いたが、南木曾町役場にお尋ねしたところ同町総務課から返信があり、その全文を知ることができた。被災当時のことが詳細かつ簡潔に記述されていて、災害を後世に残すとはこう云うことなのかと改めて教えていただいた。以下に全文を転載させて頂く。「『平成じゃぬけの碑』夏らしい暑い日だった/昼過ぎから雲が出てきた/3時過ぎから雨が降ってきた/猛烈な雨になった/1時間程白い雨が降った/平成26年7月9日午後5時40分/麓では雨が降りやむ頃「蛇抜け」が出



土石流に対する教訓が表面に刻まれている「蛇ぬけの碑」
碑の上部には「悲しめる乙女の像」が安置されている。



平成じゃぬけの碑(写真は南木曾町より)

た／南木曾山の頂から蛇抜けが出てきた／堰堤を乗り越え 梨子沢を一気に下ってきた／幾つもの堰堤がこらえた／その上を轟音とともに乗り越えてきた／道路を 橋を 線路を 住宅を呑み込んだ／悲しみが町を襲った／たくさんの人々に助けってもらった／国県多くの組織に助けってもらった／町は蘇った 山も川も蘇った／ここに住み続ける私達も 今こそ蘇る／この教訓を防災の礎とするため／本災害で発生した石で碑を残す／平成二十九年夏 南木曾町」 ☞ 実は一昨日、九州北部水害の被災地を見せて頂いたところであるが、上記の碑文の前半部分は、今回の被災地にもそのまま当てはまりそうに思われる。そして南木曾町のように復興を遂げ、町が蘇るまでには、もちろん自助努力も必要であろうが、それにも増して国や県など多くの組織の助けが必要になるものと思われる。

[2017年9月15日(金)]

○つまらないニュースばかりの昨今であるが、9月13日付けの東京新聞夕刊の一面トップの『憎みつづけている戦争を』なる大見出しを見て感動を戴いた。以下にその全文を転載させて頂きたい。「戦場のメリークリスマス」などの作品で知られ、2013年に80歳で亡くなった映画監督の大島渚さんが、自らの戦争体験に関する詩を40年以上前に書いていたことが分かった。息子のために終戦の日の出来事を記し、戦争の不条理について語り掛ける内容だ。妻で俳優の小山明子さん(82)は「戦争とは何かを、若い世代に考えてほしいという思いが伝わる」と話す。「パパの戦争」と名付けられた詩は、大島さんの長男が神奈川県藤沢市の私立小学校4年だった1973年夏、「親の戦争体験を聴く」という学校の課題を受けて書かれたという。平和教育に熱心だった元教諭の那須備述(まさのぶ)さん(87)=同県三浦市=が当時文集に掲載し、長年保管していた。小山さんの手元には残っておらず、今年に入り那須さんから文集のコピーを送られ、存在を確認したという。大島さんは京都で終戦を迎えた。詩は「戦争が終った日、パパ、13才、中学の2年」と3度繰り返す。前半部分には「朝から将棋をさす。正午、陛下の放送。午後も将棋をさす。駒、見えていない。王様は、あったかどうか」と45年8月15日の様子を記している。また翌16日のこととして、空襲を避けて庭に埋めていた本を掘り出すと、水浸しになっていた様子も書かれている。戦時中の出来事に関し「何度、上級生に蹴られたか。上級生にさからうのは、天皇陛下にさからうことだぞ！」とも。後半部分では「今、パパ、41才、憎みつづけている、戦争を」とつづり、「君に戦争はあるか。君よ、今を大切にせよ」と結んでいる。小山さんは「大島が少年の頃は、本も読めず、戦争に向かう教練をさせられた時代。家庭などで折に触れて戦争の話をしていた」。那須さんも「肉声で呼び掛ける文体で、体験を語り継ごうという思いが表れている」と話す。革新的な作品や激しい論客ぶりで知られた大島さんは、家族や学校行事を大切にす優しい父親でもあったという。これ以前にも戦争中の体験を書いた作文を長男の学校に寄せており、2015年に絵本「タケノコごはん」として出版された。小山さんは、大島さんの思いを踏まえ「戦争の歴史を今の子どもたちにもっと伝えていかないといけない」としている。

◆「パパの戦争」全文 戦争が終った日、パパ、13才、中学の2年/そう言えば/戦争が中国から太平洋へ広がった年/パパ、君と同じ 4年生だった/戦争が終った日/朝から将棋をさす/正午、陛下の放送/午後も 将棋をさす/駒、見えていない/王様は、あったかどうか/夜/母、疎開の妹を迎えに旅立つ/妹ばかり 大事にしてる/眠れない/電燈明かるく/非常食の炒り米ボリボリかじる/あくる日/庭を掘る/本を入れて埋めてあったカメ/だが、本は水びたし/君は今も見る事ができる/その本を パパの書斎の奥に/次の日/学校へ行ってみる/全校生徒で掘った/掘りかけのプール/もっこかついで土運び/何度、上級生に蹴られたか/上級生にさからうのは/天皇陛下にさからうことだぞ!/戦争が終った日/パパ、13才、中学の2年/銃とるだけが戦争じゃない/上級生のビンタ/水びたしの本/妹と別れてくらすことも/みんなパパの戦争だった/今、君に戦争はあるか/戦争が終った日/パパ、13才、中学の2年/憎むことを知り/今、パパ、41才/憎みつづけている/戦争を/君よ/君に戦争はあるか/君よ/今を大切にせよ/〈おしま・なぎさ〉1932年3月生まれ。京都市出身。「青春残酷物語」などで日本のヌーベルバーグの旗手として注目され、「絞死刑」「愛のコリーダ」など話題作を発表。78年「愛の亡霊」でカンヌ国際映画祭監督賞を受賞。2013年1月に80歳で死去した。長男の武さんは東京工芸大教授。」



大島渚監督(新聞紙面より)

[2017年9月16日(土)]

○今朝の東京新聞“筆洗”に掲載されていたコラムは、北朝鮮に振り回されている昨今のわが国の状態と比べて見ると、興味深いものがある。「1940年の秋、ロンドン郊外の名門リッチモンド・ゴルフクラブのコース上に爆弾が落ちた。ドイツ軍がロンドンを盛んに空襲していた時のことだ。クラブでは早速こんな特別ルールをつくった▼<競技中に銃撃や爆弾投下があった場合は、罰打なしでプレーを中断し、避難することができる>

〈爆弾の爆発によりストロークが影響を受けた場合、同じ場所から一打罰で打ち直すことができる〉▼空襲で「ゴルフなどしている場合か」となっては脅しに屈するようなもの。平気な顔で日常生活を続けようではないか…との姿勢を示したのだ▼きのうの朝は、大騒ぎであった。テレビは「ミサイル」ばかり。日常生活を丁寧に生きることの素晴らしさを描いたNHKの連続テレビ小説『ひよっこ』も、吹き飛ばされた▼北朝鮮がミサイルを発射しているのは、ある種の恐怖戦術だろう。電車は止まり、各地で避難訓練が行われ…という姿を見て喜ぶのは誰か、という気もしてくる▼英国の名門イートン校はかつて、生徒手帳にこういう「爆撃・爆破警報が出た場合の対処法」をのせていた。(1)建物が近くにある場合、ただちに中に退避せよ。(2)室内にいる場合、飛散するガラスを避けるため窓を開け、カーテンを閉めよ。(3)運動場にいる場合は、競技を続けよ。現実的で、ユーモアも忘れぬ。見事な危機対処心得ではないか。」

[2017年9月17日(日)]

○今朝の東京新聞の2つのコラム(山口二郎氏の本音のコラムと筆洗)からは、わが国における昨今の政治の空虚さを嘆く声が聞こえてくる。以下は筆洗からの引用である。「先日、大型ハリケーン「イルマ」が米国を襲った際、ハリケーンに向けて銃を発砲しようという呼びかけが広がり、当局が絶対にやめると訴える騒ぎがあった。ハリケーンへの恨み、ストレスも分からぬではないが、詮ない上に危険極まりない。銃社会の歪みを見る思いである▼この話に日本に残る風習を連想する。「風切り鎌」という。屋根や竹ざおの先に鎌をくくりつけて立てる。鎌で風を切って退治するというまじないである▼風におびえ「風切り鎌」にすがりたい人もいるか。「解散風」のかすかな音が聞こえる人には聞こえるらしい。28日召集の臨時国会の会期中、首相が衆院解散・総選挙に打って出るのではという現段階では当てにできぬ観測がある▼北朝鮮の動きを考えれば、選挙どころではなかろうし、解散に値する大義も名分も今はうかがえない。それでも、党利党略だけで状況を考えた場合、政権支持率が回復に向かい、離党者相次ぐ民進党が低迷する中、ここが好機と映るらしい。不穏な見立てが永田町のススキを揺らす▼「九月つごもり、10月のころ、空うち曇りて、風のいと騒がしく吹きて、黄なる葉どものほろほろとこぼれ落つる、いとあはれなり」。「枕草子」だが、与党の一部は「黄なる葉」が野党に見えるのか▼大義なき解散となれば世間の「鎌」がどちらに向くかは分かるまいて。」

本音のコラム

原子力規制委員会が東京電力の柏崎刈羽原発の再稼働に向けて、運転適格の判断を下す方針を決めたという新聞記事を読んだ、愕然とするところに、なんと破廉恥なという怒りがこみあげた。福島第一原発の事故の本当の検証は放棄された。例えば、「世界」十月号掲載の田辺文也「2号機はなぜ破損したのか」を読めば、メルトタウンの過程についてまだ説明されていないことがわかる。

3・11は第一の敗戦とか、転換点とか言われた。それが第二の敗戦のゆえんは、第一の敗戦と同じく、敗戦の責任者が免責され、過去を反省する(となく誤った政策

歴史のない国

山口二郎

を継続している点にある。原発事故がもたらしたさまざまな問題に目をつぶり、再稼働を強行する安倍政権は、戦争の歴史と同様、3・11という歴史的经验を消去しようとしている。歴史を否定すれば我々は未来を持つことができない。

無力感に浸っている場合ではない。3・11をなかつたことにするのか、3・11の教訓をかみしめてエネルギーをはじめとする日本の政策の転換を進めるのかは、政治におけるもっとも重要な対立軸である。北朝鮮に対する「この道をさらに進めば明るい未来はない」という安倍首相の言葉はそのままだ彼自身に当てはまる。野党が日本の未来を残したいなら、衆院補選において対決構図を明確にして戦わなければならぬ。(法政大教授)

2017.9.17

2017年9月17日

文責：瀬尾和大